

江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当・土屋 薫

はじめに

これまでこの場をお借りして、レジャー研究の視点から、国立公園との関わり方について検討してきた（二〇一九年一月号No.七七七、二〇二一年一月号No.七九八、二〇二二年一月号No.八〇八）。本稿では、あらためてレジャー教育という視点から、国立公園利用促進のための仕組みづくりについて、検討してみたい。

レジャーのもつ力

レジャーと言えば、一般的に自由時間に行われる遊びや行楽（自由裁量活動）として位置付けられているが、ストリートに自由裁量活動と言っても、その自由度や裁量度は「一か〇か」では定められない幅があるため、一概にはレジャーを規定できない。そこで、リベラル・アーツ概念の援用が有効

レジャー教育という視点

レジャーと教育と言うと、どうにも馴染みが悪い印象があるのは、レジャーが遊びの範疇に属するもので、生産性に資するために行われる教育や学習とは対極にあると考

えられがちだからである。つまり「遊びを教える」とは「放蕩指南」のことなのか、という思いが脳裏をかすめるからである。レジャーを労働の対極にあるものとして位置付けるのは、産業革命以降の工場労働・組織労働における生産性の回復にリアリティを置く極めて近代的な経緯によるものと考えられるが、その解明は本稿の趣旨ではないので、ここでは扱わない。ただ労働を第一義的なリアリティとして位置付けることをよしとすると、太平洋戦争期の「厚生運動」や「余暇善用論」の轍を踏むこととなる。

そうした論点を注意深く回避していくと、レジャーとは、社会の影響を受けながら必ずしも希望どおりとなつてこなかった自身のライフヒストリーの中で、ストレスから距離を置きながら自分の全体性ひいては人間性を回復していく過程としてとらえることができる。

言い換えれば、レジャーは自分自身の生を取り戻すための営みであり、レジャー教育とは、自分自身の「自由」を取り戻すために「労働」をはじめ自分を束縛しているものを照らし出す「価値」あるものについて知り、それとの関わりによって「幸福・ウェルビーイング」を実現するための場を用意することを意味する。

そこで次にはそれらを探し考えていく場としての国立公園のあり方について検討してみたい。

消費の呪縛とのせめぎあい

現代社会が産業革命の延長線上にあるものだという視点に立つと、生産手段の革命的な進展による消費社会の到来は自明なものと考えられる。その結果がもたらしたものは、市場の視点から言えば、技術の進展による画一化や製品自体の寿命を背景とするコモディティ化という文脈で語られるが、顧客の側から見ると、「嫌消費世代」と言われるバブル後に物心がついた世代の動向としてとらえることが可能だ。彼らにはそもそも購買動機がないのでCMで購買意欲を掻き立てられること自体がない、と言う。

ここから分かることは、金銭を媒介としない交換の可能性である。必ずしも金銭を軸としない景観や価値観への共感、あるいはそれらを対象とする交換の可能性が拡がりつつある、ということである。

また実際にレジャー白書のデータを見てみると、一〇八のレジャー活動（スポーツ部門（二二八）、趣味・創作部門（二二九）、娯楽部門（二二）、観光・行楽部門（二二）、その他部門（二八）のうち、年間

の参加率が二五%を超える（少なくとも年間国民の四人に一人以上参加していると考えられる）⁽⁴⁾一のレジャー活動における年代別の参加状況は図1のとおりである。そのうち、消費行動に直接的な影響が少ないと考えられる「SNS、ウォーキング、園芸・庭いじり」を除いた八活動でも、免許や費用といった制約を考慮に入れば、比較的年代別偏りが少ないだけでなく、その額面・回数から見て（図2）、国内観光旅行におけるプログラムのうちにこれらのレジャー活動を組み込むことは十分に可能だ。

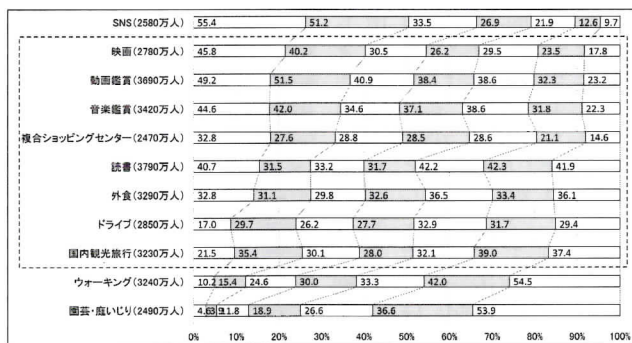


図1 各年代のレジャー活動参加率(参加率25%以上: 左から10代~70代)

消費という枠組みを取り除くと、もうひとつの論点が見えてくる。それは国立公園を訪れ利用することを目的としてとらえるか、手段としてとらえるか、ということである。二〇年ほど前の話になるが、以前私は「越中おわら風の盆」を見たいという両親と連れ立ちバスツアーに出かけたことがある。ご存知のとおり、胡弓の調べに乗った流し踊りは夜半がメインで、近隣の宿泊場所はほとんどおさえることができなかった。私が選べたツアーは、なんと上高地帝国ホテル

国立公園は目的か手段か

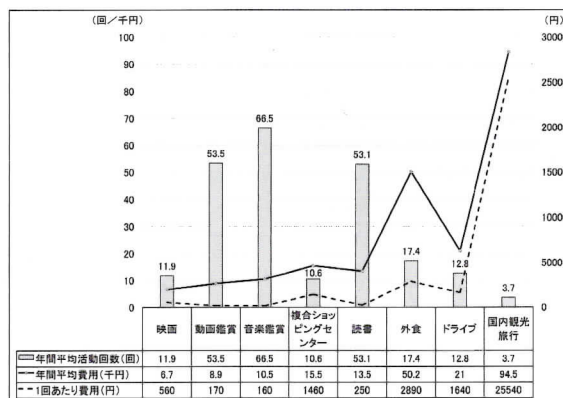


図2 レジャー活動の活動回数と平均費用(年間)

に宿泊するものだった。富山県の海岸沿いから夜道を数時間かけて上高地まで行って泊まったのである。なんと贅沢な「中部山岳国立公園の旅」だろうか。そしてこの場合、国立公園を訪れることは完全に手段であった。しかしながら、私にとって上高地は、今は亡き両親と一緒に最後に訪れた旅先であり、時に懐かしき思い出、機会があれば出かけていきたいところのひとつとなっている。卑近な例ではあるが、例えば最初は手段として訪れた場所であっても、やがて目的地としての輝きをもち得るのである。またそれは個人的なエピソードが観光地の価値に花を添えるものであり、そうした思い出への共感の可能性を考えれば、個人的なエピソードも示すべき地点情報としての力をもち得ることを示している。⁽⁵⁾

最後に「レジャー教育」の視点から本稿のテーマを整理し直すと、国立公園にしかない価値をその場で提供するのほもちろんのこと、その価値を味わい楽しめるだけの力（感性・感受性や知識・技能）を身につけてもらう場を提供すること、またそれと同時に、自分の人生やキャリアをふりかえる機会をつくり、それらを統合的に体験できる形で施設・環境を整備すること、ないしプログラム化していくことが求められる。そしてデータからは、各地の国立公園がもつ価値を、読書や映画・動画鑑賞、音楽鑑賞、ショッピングや外食というレジャー活動にあわせていかにカスタマイズして提供できるか、ということが国立公園利用促進に向けた焦点になってくることが分かる。

註

(1) 土屋薫(二〇二二)「どうやって自分の知らない世界にたどり着くか―寄り道を『たしなむ』レジャー社会学」『現場に立つから、おもしろい世界をつくる』、ひと・モノ・しくみ「春風社」

(2) 土屋薫(一九八九)「学校教育における余暇教育の可能性」筑波大学大学院教育研究科修士論文

(3) 松田久(二〇〇九)「嫌消費」世代の研究―経済を揺るがす「欲しがらない」若者たち」『東洋経済新報社』

(4) 日本生産性本部(二〇二二)「レジャー白書二〇二二」

(5) 土屋薫(二〇二二)「国立公園の利用者増に向けた方法論的原理の検討」『場所の記憶』をどのようにつむぐか「江戸川大学国立公園研究所年次報告六」

土屋 薫●つちや かおる

日本レジャー・レクリエーション学会理事、青森大学社会学科、江戸川大学ライフデザイン学科准教授を経て二〇一四年より江戸川大学現代社会学科教授。専門はレジャー社会学、レジャー教育。二〇一六年より江戸川大学地域連携センター長。